

授業科目「グローバル化と外国人児童生徒教育」

丸山 剛史

宇都宮大学の講義科目として「グローバル化と外国人児童生徒教育」が設けられ、10年が過ぎた。ここでは講義内容や受講者数について確認し、10年間の総括してみたい。

授業科目開設の契機は、田巻松雄(代表)編『栃木県における外国人児童生徒教育の明日を考える』(全166ページ)刊行にあった。2008年3月、それまでの宇都宮大学特定重点推進研究の共同研究の成果の一つとして、田巻編『栃木県における外国人児童生徒教育の明日を考える』がまとめられた。同冊子は、「第I部 栃木県における外国人児童生徒教育の現状と課題」、「第II部 教育実践—教師のやりがいと難しさ」、「第III部 外国人児童生徒教育を考えるための視点」の3部から構成され、田巻、スエヨシ・アナ(以上、国際学部)、鎌田美千子(留学生センター)、小原一馬、森田香緒里、丸山剛史(以上、教育学部)の大学教員のほか、現職小・中学校教員(原田真理子、若林秀樹、佐藤和之ら)が執筆し、栃木県の外国人児童生徒教育の全体状況を明らかにするとともに、この問題に対する示唆を与える論考を収録していた。このとき、後に開設される授業科目の担当者はほぼ揃い、内容的にも授業内容の原形がほぼ形成されていた。

その後、宇都宮大学の特徴づくりの一環として、国際学部、留学生センター、教育学部の共同による授業科目「グローバル化と外国人児童生徒教育」を創設することになった。私は、授業科目創設時から授業担当者の代表を務めていたが、当時、教育学部評議員であった松居誠一郎先生

(故人)と大学の特徴づくりへの貢献として授業科目を立ち上げることを相談した記憶がある。

近年では、国立大学教員養成系大学・学部における「外国人児童生徒のための教育」に関する授業科目は少ないが(中村琢・他「国立大学教員養成系学部における外国人児童生徒のための教育」『岐阜大学カリキュラム開発研究』第34巻第1号、2018年)、当時は東京学芸大学国際教育センターが外国人児童生徒教育問題に積極的に取り組んでおり、特に佐藤郡衛氏、臼井智美(現・大阪教育大学)氏らの研究や取り組みが知られていた。しかし「外国人児童生徒教育」をメインテーマに据えた授業科目の立ち上げは聞いたことがなかった。

国立大学において「国際」関係学部自体少なく、当時、神戸大学と本学だけではなかったかと思う。兵庫県出身の国際学部生が「国立大学で国際関係を学びたいと思ったとき、神大に行けない場合、次の選択肢は宇大になる」と話していた。こうしたことから、国際学部、教育学部の共同により「外国人児童生徒教育」をテーマにした授業科目を立ち上げれば、それは本学の特徴づけになるのではないかと話し合った。そして、共同研究にも参加し、外国人児童生徒教育の問題を早くから研究対象に据えていた鎌田美千子先生にも加わっていただき、国際学部、留学生センター、教育学部の共同による授業科目を創設することとなった(鎌田先生は、遅くとも2005年には「外国人児童生徒教育」をテーマにした論考を著していた)。問題点の指摘

にとどまらぬよう、多文化教育、多文化共生社会の構築を志向すべく、多文化教育に関心をもつ戚傑(当時・留学生センター、現・国際学部)にも参加していただいた。こうして、宇都宮大学の特徴づくりとして学部間共同による授業科目が開設された。

開設後は、森田先生が所属分野のご事情により担当から外れたが、新たに国際学部に立花有希先生が着任され、立花先生に加わっていただいた。

近年の授業の主な内容は、次のとおりである。【教育目標】授業では、①外国人児童生徒教育の意義、②背景、③現状、④論点について講義を行う。【講義内容】ガイダンス(全員)、外国人児童生徒教育とは(丸山)、外国人児童生徒教育問題の背景、外国につながる子どもたちとは、HANSについて(田巻)、多文化教育の理論、多文化教育へのアプローチ(戚)、年少者日本語教育:子どもの言語発達と日本語指導(鎌田)、日本から帰国した南米系児童生徒(スエヨシ)、諸外国における移民児童生徒に対する教育政策、幼児期の第二言語習得支援(立花)、外国人児童生徒教育の教育実践(若林)、外国人児童生徒教育における教師のジレンマ、階層格差問題(小原)、パネルディスカッ

ション:まとめ・質疑応答・討議(全員) ※最終回の実施方法は課題になっている。

受講者数は、60名から160名の間で推移している。これまで後期火曜日、3・4時限目に開講しており、同時時間帯のような科目が入るかにより、受講者数が大きく変動してきた。国際学部、教育学部の受講者が大半であるが、陽東キャンパスの工学部、地域デザイン科学部の学生もわざわざキャンパスを移動して受講に来ていることも着目される。

2020年度発足の共同教育学部では、「グローバル化と外国人児童生徒教育」は重要な要素の一つとして必修化されることになり、群馬大学共同教育学部の学生(190名)と合わせて、共同教育学部の学生だけで360名の学生が受講することになっている。

紙幅の都合上、詳述できないが、授業の一部は栃木県教育委員会主催教職員サマーセミナー(教員研修)でも取り上げ、好評であった。

今後は、内容の深化を図り、応用的な内容あるいは各論的な内容の授業科目を設け、系統化させ、深化発展させていく必要がある。

	国際学部	教育学部	工学部	農学部	地域デザイン科学部	総計
2010	48	14				62
2011	80	76	1	1		158
2012	36	40	1			77
2013	69	45	8	9		131
2014	70	107	4	2		183
2015	43	23	2			68
2016	60	62	11	1	1	135
2017	48	28	3	1	1	81
2018	99	27	2	3	2	133
2019	24	31		4	1	60